

『感情教育』の中の二月革命

— フロベールと同時代の作家たち —

小倉孝誠

I

既存の社会組織と価値体系を根本的に問い直し新たな秩序を構築しようとする革命運動を前にして、作家は、謂わゆる政治問題に無関心であっても、まったく中立的な立場を維持することはできない。1848年の二月革命の目撃者だった作家たちも、その点で例外ではない。この歴史的な事件は衆目の見るどころ、立憲王政から共和政へという政体の移行を実現させたことよりも、むしろ新たな社会制度の編成を象徴していたが故に国民の記憶に刻まれるべき出来事だったからである。彼らは皆、何らかの反応を示すことを余儀なくされるだろう。

事実、1848年の革命は19世紀フランスにおいて勃発した他の革命的な事件よりもはるかに強く文学者や歴史家を刺激し、また政治的・社会的思索を誘発した。それらの思索を綴る言葉の多様性と深みは、今日の読者の興味を引き付けて止まない。レイモン・アロンは、1848—1851年の第二共和政が20世紀の社会的・政治的葛藤の基本的図式を予告しているとして、そこに瞠目すべき現代性を認めている。確かに対峙する党派や集団は同一ではないし、彼らの抗争は異なった状況の下で繰り広げられはするものの、第二共和政の展開は既に、20世紀の主要な政治的人物と典型的な対立関係を提示してくれるのである⁽¹⁾。

二月革命がもたらした新たなイデオロギー的与件に対して、ギゾーやオーギュスタン・ティエリーなどの自由主義的歴史家は全く盲目であり、茫然自失状態の中で硬化していく。彼らにとって二月革命は不幸な偶然の集積の結果にはかならず、ために歴史の理解可能性は突如として失われたからである⁽²⁾。それに反し、数多くの作家や思想家はこの歴史的現象を、擁護するためであれ、あるいは断罪するためであれ、いずれにせよ理解し、解釈しようと努めた。そして、二月革命によってフランス社会が新たな歴史的段階に入ったと認めることに彼らは同意するのである。1848年以降は、歴史はそれ以前と同じ観点を採用してはもはや解読されえない。歴史家たちは、広義のロマン主義文学が二月革命の勃発と成就に際してもたらした思想的・感情的貢献を強調する。それは単に、幾人かの文学者が革命の日々を通じて、生成されつつある歴史に積極的に参加したためばかりではなく、ロマン主義時代の理論的言説が、1848年とその前後の知的・社会的な生活に深い刻印を残したからである。そして、束の間の歴史

的生命を享受した後、ルイ・ナポレオンの独裁権力の前に崩壊することになる第二共和政が、ロマン主義イデオロギーの理想とその清算過程を集約的に表現していることをここで改めて確認しておこう。

マクシム・デュ・カンの証言により⁽³⁾、我々は、フロベールが「芸術的観点」から革命を観察するためにルーアンからパリに駆けつけ、パリ市街での銃撃戦に立ち合ったことを知っている。審義主義的作家にとっては、歴史的地殻変動もまた一個の美的観照の対象にすぎなかった、などとして顔に主張するつもりは毛頭ない。ここで喚起しておきたいのは、デュ・カンに抛れば革命渦中のパリを銃弾の危険に身を曝しながら放浪して歴史的瞬間の細部を視覚におさめた筈のフロベールであるにもかかわらず、同時期の彼の書簡にはこの劇的体験の痕跡が殆ど見当たらない、という一事である。1848年のフロベールにとって、二月革命は「滑稽な」出来事であり、彼は野心家たちの挫折を半ば嗜虐的な喜びをもって嘲笑することをためらわなかったものの、唯一の不安といえば、成立したばかりの共和政府が「芸術」に好意的か否か、という若き作家にはさして珍しくもない疑問であったにすぎない⁽⁴⁾。二月革命の歴史的意味を測定できるようになるまでには多くの時間を待たなければならないだろう。革命とその後の反動が「二つのフランスの間に深淵を穿た⁽⁵⁾」とフロベールが呟き、自分の世代にとってそれが一つの歴史的亀裂であったと自覚するのは、彼が『感情教育』を執筆している時のことである。実際、この作品が、七月王政末期と第二共和政を歴史的背景に据え、二月革命を主要な挿話の一つとして説話論的構造の中核に組み込んでいることは広く知られている。しかし、二月革命が因果論的にフロベールの小説の構想と生成を説明するのではなく、逆にフロベールは『感情教育』を書きながら、そして創作のために莫大な量の資料を渉猟しながら、1848年が何であったかを発見したのである。フロベールにとって二月革命は所与の歴史的現実でも既定性でもなかった。そうではなくて、彼は小説のエクリチュールという極めて個人的な経験を媒介にしてその歴史性を見出したのだ。では一体、フロベールが再構成した歴史像とは、いかなるものであったか。その美学的媒介装置とイデオロギー的射程を正確に把握するためには、同時代に生産されたテキストへの参照行為が有益な示唆をもたらしてくれるだろう。『感情教育』の少なからぬ頁は、それらのテキストとの共鳴関係あるいは葛藤状態の中で書き綴られたからである。比較参照されるテキストはその形式において多様であり（書簡、新聞記事、回想録、歴史書など）、その著者たちの思想的立場は互いに異質である。これらのテキストを体系的に研究したり、著者たちの思想系譜を辿ることは別の機会に譲ることとして、本論ではフロベールの小説が特権的に強調していると思われる主題との連関で分析の対象にしよう。テキストの選択は、形式の多様性を際立たせ、異なった主張の代弁者たちの声を響かせることを基準にして行われたものである。資料体は網羅的ではないが、また一定の党派性を有するものでも

ない。

『感情教育』の小説構造において歴史の組み込みを引き受ける基本的主題は次の三つである。

- 1) 二月革命と1789年のフランス大革命の比較。
- 2) 社会主義に関する評価。
- 3) 歴史の表舞台に登場した「民衆」の役割。

II

フランス大革命と二月革命の比較は、後者の証人たちにとっては極めて自然な行為であった。1848年に限らず、19世紀を通じて大きな歴史的変動の時期には、常に1789年が革命の淵源として、従って新たな歴史的・社会的状況の判断を可能にする準拠枠として、喚起されることになる。しかし、参照の枠組は同一であっても、二月革命の歴史的評価に関しては、同時代の作家群は二つの集団に載然と分類される。共和主義的理想や社会主義理論にたとえ一時的であるにせよ賛同した者たちは、1848年の出来事の内に自分たちの政治的信仰が聖別化されるのを見、それを歴史的合理性の相の下に捉えようとした。1848年は1789年の指導的原理との和解であり、それを新たな社会的条件に従って永続化させようとするのであって、その限りにおいてはフランス革命が創始した歴史的論理の圏域に組み込まれる筈である。かくして例えばボードレールにとって二月革命は、単にフランスの歴史においてのみならず同時に世界史全体にとっても画期的な事件として映ずる。「2月24日は人類の最も偉大な日である！来たるべき世代は、国民主権という権利が決定的に、最終的に到来したのは2月24日と言うだろう。」詩人はさらに、1789年に対する1848年の優越を主張しさえする。「確かに、1848年の革命は1789年のそれよりも偉大になろう。しかも、一方は他方が終わったところから始つたのだ。」⁽⁶⁾共和政の無条件的支持者としてノアンからバりに急行したジョルジュ・サンドもまた、1789年との比較対照によって二月革命の価値付けを行った一人である。「1848年の共和国は1789年に宣言された義務に、その後の半世紀間に成熟した義務を移植した。私たちが置かれている状況は同一ではないが類似している。私たちの責務はより重大で、より正しく理解され、そしてより美しい。」⁽⁷⁾ここで二人の作家が共有しているのは、歴史的経験は国民の記憶として蓄積されるという想念、それぞれの時代は、過去の類似した経験を想起しながらそこに新たな集団の営為を賦与していくという考え方、である。彼らにとって歴史とは、絶えざる自己超越の中で形成され進展していく、有機的過程なのだ。

このような歴史観は、しかしながら二月革命の解釈としてはむしろ例外の部類に属すると言わねばならない。大多数の作家、思想家たちは1848年を1789年あるいは1793年の戯画化された模倣として捉えたのである。19世紀中葉の革命家は、国民公会議員によって形成された歴史的・伝説的な原型に依拠して振舞つたにすぎない。前代未聞の状況に

対処すべき責務を担わされた者たちは、18世紀末の革命家たちの身振りと言説を鸚鵡返しに反復するだけに終わった、と彼らは侮蔑と憐憫を相半ばさせながら言う。例えばユゴーは、1848年の政治家たちを1793年の山岳党員の退嬰的転身と見做して、その擬態的性格を強調することを忘れない。「マラーやクートンやカリエ以下に人は成り下がることのできる。いかにして？ 彼らを真似ることによって。彼らは恐ろしく、しかも謹厳だった。人は今や恐ろしく、かつ滑稽になろうとしている。何だって！ 恐怖政治の茶番劇！ 何だって！ ギロチンの剽窃！ これ以上醜悪で愚劣なものがあるか。ちょっと見るがいい、これが君たちの望むものなのか。93年には、それに相応しい男たちがいた。あれから55年経った今は、猿どもだけだ。」⁽⁸⁾同様にメリメは、1848年3月30日付の手紙の中において、辛辣な口調で弾劾する。「独創性などまったくない一人が、最も模倣しやすいものを模倣している。かくしてこの国の政治家連中は、大革命の愚劣さを模倣している。」⁽⁹⁾フロベールが蛇蝎の如く嫌悪した社会主義者ブルドンですら、二月革命の模倣性、歴史的偉大さの完全な欠落を嘲笑して止まない。「2月24日は、いかなる理念もなしに行われた。」⁽¹⁰⁾二月革命は理念なき革命、従って明確なイデオロギー不在の革命であった。彼にとっては、二月革命は、大革命の幻想的威信によって誘発された時機尚早の出来事にすぎない。「今日人々の脳裏を去来しているのは、〔…〕89年の思い出、大革命の歴史家＝小説家の作品を読むことによって鼓吹された熱狂である。」⁽¹¹⁾そして最後に、聡明な自由主義者トクヴィルもまた同一の主題を復唱しながら、痛烈な逆説を露呈させる。すなわち、危機と無政府状態の時期、新機軸の可能性を模索しなければならぬ瞬間にこそ、人は蓄積された過去の政治的遺産に行動の規範と準拠枠を求め、伝統的な言説と言古された名前に依拠しようとするのだと。「最初の革命を成就せしめた者たちの姿が、すべての人々の精神の中に生きており、彼らの行動と言葉がすべての人々の記憶に現前していた。その日（＝2月24日）私が見た全てのものが、この思い出の痕跡を明白に呈示していた。人はフランス革命を継続させるよりも、それを演じることに腐心しているように、私には思われた。」⁽¹²⁾1848年は、革命という相も変わらぬ政治劇の、新たな役者たちによって演じられ、付け加えられた新たな一幕にすぎない。何も変わりはしなかった。革命の演劇化は、その歴史性を稀薄化させ、その社会的次元を萎縮させる。ユゴーからトクヴィルまで、異なった資質をもち、1848年以前においても以後においても多様な行動をとった作家たちは、1848年をフランス革命の退廃的擬態と見做す点で鮮かに一致するのである。

フロベールの『感情教育』もまた、政治的領域における個人的・集団的模倣の側面を繰り返し析出させている。その析出の機構を媒介するのは、書簡や回想録に見られる直截な言葉でもなければ、理論的言説でもなく、作中人物の行為をその内部に組み込んだ説話論的図式と具体的な状況の象徴性である。

小説の主人公フレデリックは、1848年4月の憲法制定議会議員の総選挙を前にして身の程知らずの政治熱に感染し、友人たちに刺激されるままに立候補を思い立ち、あ

る日、革命直後に乱立した政治クラブの一つ《知性クラブ》の集会に赴く。しかし、この名称の反語性は、挿話の初めから露呈してしまうのだ。

「彼らは路地を通して、やがて、ふだん指物師の使っていると思われる大きな部屋に入った。まだ新しい壁から石膏の匂いがした。平行に吊り下げた四つのケンケ・ランプが不愉快な光を投げていた。正面の壇上に、呼鈴をのせた事務机があり、少し下がって演壇のつもりのテーブル、そして両側に書記用のもう少し低い机が二つあった。」⁽¹³⁾

厳粛な名を載く政治クラブはそれに相応しい場所を持たない。雄弁な政治家の勇猛な演説を響かせもするであろう会合の場は、同時に、奥まった人目に余りつかない、卑近な職業空間でもある（指物師の部屋）。国家とその制度について議論を上下するかもしれない場は、日常生活の空間と重層し、人々の意図と質素な室内装飾の対照は鮮やかに顕現する。政治的な象徴がまったく不在というわけではない。弁士のための演壇と書記用の机が設置されているからだ。しかし、審議の場の相貌はまやかして、かりそめの仮面にすぎない。実際、《知性クラブ》の集会は時を移さず、混乱を極めるバベルの塔に変身してしまうだろう。そこでは、誰もがわれ先に発言の権利を主張して他人の意見を顧慮せず、その挙句読者は聳者の対話に立ち合うことになる。スペイン語で発話され、従って聴衆の誰一人理解できない《バルセロナの愛国者》の演説が、この言語的潰走を完成する。《知性クラブ》の参加者たちは、18世紀末の革命家＝雄弁家を模倣しようとしてその企図に失敗し、革命は劇的緊張を失い、今や矮小な笑劇と化してしまう。政治的言説の無効性は、この場面の主題論的有効性の増幅に大きく貢献してくれる。フロベールは、政治的象徴の過剰性と出来事の不条理性的の対照を際立たせ、歴史的神話とその幻想的な再生の懸隔を強調することに、殆ど加虐趣味的悦びを感じているかのようである。

クラブの議長、社会主義者セネカルは、聴衆に対するその相対的な知的優越にも拘らず一あるいはそれ故に一、このような模倣遊戯から疎外されるどころか、まさしくそこに惑溺していく。「当時、誰もかもあるモデルを手本に行動していて、ある者はサン・ジュストを、ある者はダントンを、またある者はマラーというふうに見似ていたのだが、そこでセネカルはブランキに似ようとつとめていた。そしてこのブランキ自身はロベスピエールを手本としていたのだ。」⁽¹⁴⁾ フランス大革命の主役たちの名前が1848年の端役たちの振舞を規定してしまうという歴史的逆説。《知性クラブ》の挿話は、反復された国民公会の戯画として読まれるだろう。光輝ある革命への郷愁があまりに執拗に政治的記憶の内に根差している故に、世界を変革しようと主張する者たちは、我知らず過去の亡霊どもを呼び起こすのである。

政治集会が、革命の擬態を集約的に現出させる空間であるにしても、しかしそのための唯一の説話論的装置ではない。セネカル以外にも幾人かの作中人物たちは、1848年の世代の歴史的病弊を顕在化させる役割を語り手によって荷負わされている。主人

公の親しい友人デローリエは、小説の第一部第二章に読まれる次のような言葉を口にする。「あの八十九年の再来がいま準備されているんだ。」⁽¹⁵⁾小説の年譜に従えば1840年9月に呟かれるこの予言は、来たるべき革命の模倣的次元を既に暗示していると言えるだろう。しかもデローリエは、その立場決定においても政治的言動においても、意識的・無意識的にセネカルを真似ることを我々は知っている。また、「ルイ十四世に意見をし八十九年を予言する下層民の役をつとめた芝居以来、たいそう認められ」⁽¹⁶⁾た大根役者のデルマールは、絶えず諸国の君主を罵倒する役を託され、様々な仮装の下に同じ蜂起の場面を演じ続ける破目に陥いる。革命を舞台で演じ続けたデルマールは、ひとたび実際に革命が勃発するや、いかなる整合的な言説も自らは構想できない。しかし、そのような失語状態への転落も、思わせ振りの仕草さと虚飾によって彼が政治クラブの演壇という新たな舞台で喝采を享受することを妨げはしない。この民衆の英雄の成功は、二月革命がいかに芝居的で模倣的性格のものであったかを強調しているのだ。

『感情教育』が表象するこのような二月革命の歴史観を論じる時、人はしばしばマルクスを引照基準にしてきた⁽¹⁷⁾。事実、1848年を1789年の喜劇的な反復として提示する点で、フロベールの作品が再構成する歴史像とマルクスが下した診断は符節を合している。「一八四八年の革命は、あるときは一七八九年をもじり他のときは一七九三年から一七九五年にいたる革命的伝統をもじるぐらいのことしかできはしなかったのである。」⁽¹⁸⁾しかしながら、『感情教育』の歴史的価値を測定するために、『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』の著者を特権化する必要はないだろう。先に見たように同時代の作家の幾人かは、マルクス程の徹底性と痛烈な修辞を持ち合わせてはなかったものの、少くとも彼と同じ程度の聡明さをもって事態を把持していたからである。

III

1848年の一連の出来事を目撃者であった作家及び思想家たちは、その態度表明の相違にも拘らずある一点において共通の認識に達する。すなわち、二月革命が本質的に社会主義理論の磁場の内部で達成された、という認識である。しかし彼らは、同一の診断から異なった結論を抽出する。ある者たちにとって、社会的平等への志向（これが19世紀前半に構築されたフランス社会主義諸理論の、最大公約数的定義である）は、合法的で当然の権利要求にはかならない。プルードンに拠れば、このような思考を基底に据える二月革命は、偶発的な社会の異変事であるどころか、フランスの社会的進展を統御する一般的趨勢に照応しており、その限りで「革命的弁証法の法則」⁽¹⁹⁾を例証するものである。彼の主著の一つ『十九世紀における革命の一般概念』（1851）は、19世紀の革命は何よりも社会的、経済的であらねばならぬ、という主題を到る所で復唱している⁽²⁰⁾。これに反して他の作家たちは、社会主義を二月革命のイデオロギー的

機軸と同定しながらも、社会の再編成の領域におけるその実際の有効性には懐疑的であり、様々な留保をつけることになる。1848年のユゴーは、穏健な共和主義の名において社会主義の過激性を断罪し、社会変革を企図する理論家・実践家たちが、自分たちによって提出された理念の高みに到達していないと嘆く。彼らは、長い間実現を希求していた出来事に乗り越えられてしまい、思想がそれを創り上げた者の意図に絶えず先行するという不幸を詩人は指摘しているのだ⁽²¹⁾。トクヴィルの判断はもっと陰影に富んでいる。彼は確かに、社会主義が1848年2月から6月に到る時期を特徴づける教説であることを理解していた。「社会主義は、二月革命の根本的な性質、その最も恐るべき思い出として残るだろう。共和政は遠い将来、目的ではなく手段として映ずることになる。」⁽²²⁾社会主義理論が複数の経路を辿って民衆の間に浸潤していった事実の内に、トクヴィルは歴史的論理さえ認めることに吝かでない。1789年以来、民衆の知識と社会的な力は増殖することをやめなかったのであるから、彼らが、政治制度のみならず社会の機能を構成する基本的な規範までも改変することによって、自分たちの強いられた劣等性を克服しようとするに到ったことは、必然的な成り行きではなかったか。しかし、歴史的に論理的な事は、社会的には必ずしも正当でないし、また正当化もされえないだろう。かくしてトクヴィルは、社会主義を当時の状況の下では時機尚早の思想と見做し、その結果、自由の名において彼が擁護しようとした社会の恒久的原理に対する潜在的な脅威として忌避したのである⁽²³⁾。

ルナンもまた、社会主義が二月革命の指導的理念であることを見抜いた一人である。この教説の生成と伝播は、19世紀の精神的・政治的風土においては不可避であった、と『科学の未来』の著者は言う。「社会主義の活力を生ぜしめているのは、それが現代精神の完全に正当な傾向に一致している、という事実であって、その意味で、この傾向の当然の発展である。」⁽²⁴⁾トクヴィルとルナンでは、表現や用語は同一でないし、観点もいくらか異なる。『回想記』の著者は、遂には1848年の危機に帰一したフランス社会の変遷の内に、歴史的連続性を見るのに対し、ルナンはそこに進歩へと向う哲学的論理の顕現を認める。(1848年当時のルナンは、19世紀が啓蒙時代から思想的遺産として受領した「進歩思想」に帰依していた、と付言するのは蛇足であろう。)しかし両者とも、社会主義が社会的平等という19世紀の人間にとって本質的な問題を明瞭な言葉で定式化したことには同意する。ただし、一と『科学の未来』の作者は続ける—1848年の社会主義は、この問題を解決するための措置において誤謬に陥っている。「理論的な傾向と原理に関しては、僕は社会主義者たちに完全に同意するが、彼らが提案する手段は全て幻想的であり、彼らが追求する目的に背馳するものだと思う。」⁽²⁵⁾すなわち、ルナンは惹起された問題の適合性はこれを承認するものの、我々が「臨時的で不安定なものの中」⁽²⁶⁾に生息している、という現状のもとではその解決策は実行不可能と断じるのである。社会主義理論の現実化は、当面の状況では望むらくもなく、無限定の未来にまで延期されているのだ。

そして最後に、著名な辞典の編纂者として我々に親しいリトレが、トクヴィルやルナンに同調して同一の主題による変奏曲を響かせてくれる。その著書『保守・革命そして実証主義』（*Conservation, révolution et positivisme*, 1852）は、コント流実証主義の立場からなされた歴史哲学的考察に主要な頁を割き、同時に二月革命に関する解釈を包含しており、社会主義がいかなる条件の下で19世紀の政治圏域に導入されるに至ったか、という問いは其中で特権的な話題に属している。リトレに拠れば、労働者階級の漸進的拡張は18世紀までのカトリック的統一性が破綻したことの当然の結果であった。腐朽した諸制度の動揺に科学的知の発展が加わり、その相乗作用の中で「下層階級の解放と彼らのより完全な生活への到達」⁽²⁷⁾が現実的な歴史的課題となる。下層階級は既に旧くなった信仰を棄て、自分たちの惨状と潜在的な政治的影響力を明確に自覚するに到ったのであり、そこに社会主義生成の歴史的磁場が形成された。「下層階級の増大しつつある主導性こそが、政治に道徳的傾向を賦与し、明らかな必然性により社会主義思想を招来したのだ。この思想を誘発した感情は、我々の父祖が始めた革命の直接的延長であるのみならず、また同時に、当然そうなる筈であったように、民衆の要求の表現であり、過去の倫理よりも優れた倫理によって鼓吹されたものである、と私は確認する。」⁽²⁸⁾リトレは社会主義理論の登場とその普及を歴史的、倫理的に必然的であったとしてこれを正当化している。すなわち、ブルードンやルナンと同じく、社会的平等を志向する教説は時代の要請だったと見做すのである。しかし彼は、この教説の価値付けに関しては同時代の思想家と袂を分かたず、事実判断の一致は価値判断の相違を妨げない。当時リトレが信奉していた実証主義哲学の体系に照合すれば、社会主義はより良い社会組織を建設するために通過すべき一階梯に他ならず、「解体する過去と、未来の宗教たるべき人類という至高概念の間に存在する一つの輪。」⁽²⁹⁾として把握される。換言すれば、社会主義はそれ自体最終的な解決策ではなく、「人類教」を未来において実現するために不可欠だが超越すべき歴史的段階の哲学、その意味で優れて過渡期のイデオロギーなのである。

これまでに略述してきたテキストは、それぞれの著者の歴史哲学と現実観察を分節化し、二月革命の際に社会主義が果たした役割についての考察を報告してくれる。テキストはいずれも革命勃発直後に執筆されたものであり、時間的距離がしばしば可能にする客観化とそれに随伴する訂正を容れていない。『感情教育』は、これらのテキストよりも遙かに少く、そして同時に遙かに多くを語っている。

フロベールの小説の語り手は、19世紀における社会主義の到来の歴史的原因を問うことはない。社会ユートピアや人道主義的宗教 (*religion humanitaire*) のような思想現象を合理的に解釈することは、彼の関心の圏域に属さない。それにも拘らず、『感情教育』という作品は作中人物の政治的輪郭と経歴を媒介にして、社会主義を表現し、それを思想の角逐の中枢に据えており、社会主義の歴史的存在的意識化が、作品の全体を貫流していると言えるだろう。とりわけ、その理論的遍歴と過激な立場表明の多

様性によって社会主義の全ての潮流を体現しているかに見えるセネカルの肖像に、人は注意を向けねばならない。不寛容な教条主義は、物語全篇を通じて看取される彼の常数的属性である。彼は触知可能な具体的現実を犠牲にして、絶えず理論を特権化しようとする。「尖った頭をしたセネカルは体系にしか目をくれなかった。」⁽³¹⁾まるで頭骨の形と知的傾向の間に一定の照応関係でも存在するかのようであるが、この点の解明は骨相学者に一任することにしよう。社会主義者セネカルの「理論信仰」は、個人主義の徹底した排撃と表裏一体を成す。かくして義務の感情と専制主義の欲求が無媒介に混在するセネカルは、アルヌーの瀬戸物工場の監督官になるやいなや、その労働者たちに対して不当な峻厳さを示してしまうのだ。「理論一点張りの男だけに、ただ大衆のことが頭にあって、個人個人には何の苛責もしなかった。」⁽³²⁾一方には体系化された理論と集団の目標があり、他方にはセネカルの関知しない情動と個人の世界があって、この作中人物にあっては両者の間にいかなる和解も成立しえない。実際、話者によって社会主義者、民主主義者あるいは共和主義者と形容されるセネカル—あたかもこの三様の呼称が常に相互補完的で代替可能であるかのように！—、この人物にあっては、極端な法治主義への志向がその行動と言説においてしばしば浮上してくる。彼にとって民主主義とは「法の下における平等」⁽³²⁾であり、『知性クラブ』の議長として聴衆を威圧する彼は、「法令のようないかめしい文句を用いつつ、独断的な調子」⁽³³⁾で言葉を連ねていく。そこでは、彼の言説は、必然性と厳格な束縛を示唆する言語学的符標を増殖させるのである。19世紀の社会主義はその客観主義的及び科学的主張において、人類ないし社会を歴史の絶対的な主体となし、しばしば個人には進歩への参画を禁じており、その意味で自由主義イデオロギーに真向から対立することを、ここで喚起しておくのは無駄ではあるまい。セネカルは「ドライ＝ラマヤナブゴドノゾール王より専制的で、絶対で、確実に神的な社会」⁽³⁴⁾、個人が社会のためにのみ存在するような社会を夢想する。社会的目標の個人的営為に対するこの絶えざる優越こそが、セネカルの変節を説明する鍵である。革命の理想が流産した後、「権威」の使徒を任じて「大衆の未熟性」を嗟嘆する彼は、民衆を救うための暫定的手段として独裁制を容認するに到り、空想的社会主義から専制政治の顕揚へと地滑り的に移行していく。「結果がよければそのことを正当化する。独裁も時にはぜひ必要だ。压制者がいいことをしてさえくれれば、压制政治も万歳さ。」⁽³⁵⁾ルイ＝ナポレオンのクーデター直後に、セネカルが武装した警官となって読者の前に姿を現すのは、「社会主義者」セネカルの論理的帰結にはかならない。フロベールの思考の前提体系は、セネカルの変貌を当初から説話論的及び主題論的展開の中に必然的なものとして組み込んでいたのである。過激で典型的な革命家の巡歴と帝政権力への完全な癒着が矛盾するのは、表面上の事柄にすぎず、同一の心性が二つの極端な立場に通底していることを、フロベールの作品は示そうとしているのだ。

1840年代と二月革命を特徴づけた社会主義及び人道主義的思想の文学的形象化の領域における、『感情教育』の最大の独創性は、これらの思想体系の内部に政治的なも

のと宗教的なものの結合、俗権と教権の混淆を別決したことである。この点でもセネカルは特権的な作中人物である。彼はその最初の出現の時から厳肅な聖職者の雰囲気漂わせ(「灰色の眼の中に、何かしら冷酷なものが光っていた。そして長い黒フロックという身なり全体に教育家や僧侶のようなものが感じられた⁽³⁶⁾」)、自分の敵対者には「幾何学者のような推理と宗教裁判所の裁判官の信念」⁽³⁷⁾をもって挑み、普通選挙が実現してこそ、民主主義の勝利、福音書の原理と精神が実現されると主張する⁽³⁸⁾。ここでは隠喩の重大さは決定的である。セネカルの肖像と言説は、社会変革を目差す思想とキリスト教的精神の遭遇の小説的表現にほかならない。しかも彼は、宗教性と政治の連帯関係を体現する唯一の作中人物ではないのだ。ペルラン、あらゆる様式に誘惑されいかなる価値ある作品も創造できないこの老画家は、革命の昂揚の渦中で「共和国あるいは「進歩」あるいは「文明」を象徴し、原始林を走る一台の機関車を操縦しているイエス・キリストを表現」⁽³⁹⁾する絵を描く。この絵画的図像においては、共和国の理想と人道主義の思念が新たなる福音書の伝道と野合し、その奇妙な雑多性はペルランにおける美的探求の放棄を確認し、彼の芸術的生命の終焉を証言しているかに見える。彼は、芸術の名において中世と王政への郷愁を表明するに到るだろう。役者のデルマルまでが、宗教性と政治的情熱の連鎖を露呈させる役目を担う。「民衆」の象徴あるいは顕現として庶民の愛顧を得る彼は、「聖ヴァンサン＝ドゥ＝ポールとブルータスとミラボーをつきまぜたような人物」、すなわち聖者の面貌と政治的英雄のカリスマ性を兼備した人物として観客の前に立ち現れるし、「使命をいだいていて、キリスト扱い」⁽⁴⁰⁾されるまでになってしまう。そして革命時には、「聖職者のような真面目くさったようすで、売春についての人道主義的な詩を朗誦」⁽⁴¹⁾するのである⁽⁴²⁾。

書簡集においてフロベールは、無謬性を僭称する科学的定式や理論的枠組を援用して来たるべき社会の決定的模型を構想する思想家たちを弾劾している。彼にとって社会主義とは専制と同義語であり、従って芸術と道徳性の破壊に通ずるとされるのである⁽⁴³⁾。より具体的には、『感情教育』執筆(1864—1869)と同時期の一連の手紙において、作家は社会主義思想内部での政治性と宗教性の相互浸潤をしばしば別決し、それが二月革命の経緯に致命的な影響を及ぼしたことを強調する。「僕が社会主義の内に見出すキリスト教の比重はたいへんなものです」⁽⁴⁴⁾「僕は今1848年の革命に取り組んでいます。そしてその時代を研究しながら、現在の状況を説明してくれる過去の事柄が多くあるのを発見しました。カトリック教の影響は巨大で嘆かわしいものだったと思います」⁽⁴⁵⁾ここでフロベールは、事実判断の地平では誤謬に陥っておらず、社会主義及び人道主義的思想の本質的な一面を正確に把握した功績を認めてやらねばならない。なぜなら19世紀前半の社会ユートピア思想は、宗教性を包摂した教説として自らを定位する志向を隠さなかったからである。自らが明らかにしたと称する歴史的法則の論理に社会の進歩を組み込みながらも、この思想はキリスト教神学と終末論の

磁場から解放されてはいない。過去の社会の分析において科学性を主張し、未来社会の構図の予言において宗教性を援用するユートピア思想は、かくして絶対的な教権として組織立てられるのを望んでいたのである⁽⁴⁶⁾。このような思想的次元は、サン＝シモン主義者たちにおいて極めて鮮明に露表する。彼らは、フランス革命によって惹起された社会的変化に対応すべき新たな宗教的時代の聖職者たろうとしていた。サン＝シモンの主著の一つが『新しきキリスト教』(*Le Nouveau Christianisme*) という標題を冠しているのは偶然ではない。サン＝シモン主義者たちの言語と行動様式、そして彼らの共同体組織の様態は、明らかに原始キリスト教社会のそれを模倣していたのだ。

価値判断の観点からすれば、反教権主義者であるフロベールの眼には、政治と宗教の混淆は許容しがたい逸脱でしかなく、従って社会主義思想内部へのカトリック教の浸透の告発は、痛烈な言葉で表現されることになる。「一方ではネオ・カトリシズムが、他方では社会主義がフランスを愚かにした。全ては、無原罪の御やどりの教義と労働者の飯盒の間で死滅してしまう。」⁽⁴⁷⁾その成就が社会主義の普及に多くを負っていた二月革命は、このイデオロギーの構成要因たる宗教性の故に、流産すべき運命にあった。フロベールは、トクヴィルやルナンのように整合的な歴史哲学を定式化はしなかったが、社会主義理論の教権主義的相貌を浮かび上がらせることにより、1848年の革命家たちに下した審判において同時代人よりもはるかに徹底していたと言えるだろう。

IV

1848年に民衆が果たした役割をどのようにに評価するかが問題になる時、同時代の作家たちの意見はことのはか多様であり、その変動の振幅もまた大きい。民衆の歴史的任務と政治的能力に関する省察は、イデオロギー的分極化を結晶させることになる。勿論、民衆をめぐる論争は1848年の状況に限定されるものではない。「民衆」は19世紀の文学と歴史学における巨大な神話であり、想像力と社会性を分節化する概念として激しい議論を惹起し続けた。しかし1848年に民衆は革命への決定的貢献をもたらしたことにより、一躍歴史の前景に踊り出たのであり、「民衆」という語は、モーリス・トゥルニエが説得的な論述で示したように、二月革命の主要な語彙素として集団的想像力の中に定位されていたのである⁽⁴⁸⁾。すなわち、民衆の行動をいかに意味づけ、それをいかに表現するかは、単純で無償な仕草ではありえなかったということだ。

第二共和政の成立を、待ち望んでいた新たな時代の到来として歓迎した作家たちは、民衆（しばしば大文字で記される）を神聖化し、革命運動の中心的主体、共和主義的原理の担い手として擁立する。ジョルジュ・サンドの場合は、この点で典型的である。「私は偉大で、崇高で、素朴で寛大な民衆を見ました。それはフランスの中心、世界の中心に集まったフランス国民、地上で最も素晴らしい民衆でした。」⁽⁴⁹⁾ルイ・メナー

ルも同様に、その『革命の序幕』(*Prologue d'une révolution*, 1849)の中で、民衆を革命の大義の受託者、歴史的過程の導き手として定義し、民衆はフランスが待望している新しい宗教の司祭たるべきだと主張する。ルナンでさえ、加速度的に変化する歴史の合理性を承認する哲学的楽観主義の立場から、当初は民衆に対する殆ど無邪気な賛辞を惜まなかった。「パリの民衆は善良で、聡明で、良識と廉直に満ちています。怒った時には恐ろしい民衆も、勝利の後は笑い歌うことしか考えていません。」⁶⁰歴史の先導者として民衆を称揚するのは、ミシュレに代表されるような人道主義的民主主義の教説との確かな親近感を証言するものである。

しかしルナンの幻想は長く持続しなかった。彼は間もなく、庶民階級に対する昂ぶった顕揚を撤回することになる。「親しい友よ、私が現在あるがままの民衆を愛しているとか、社会を粗雑で下品な類型に引き戻そうとしているなどと思わないで下さい。」ルナンは、民衆が有しているであろう潜在的な可能性に賭けるのである。「私が民衆を愛するのは、彼らが今後成りうるものの故にであり、彼らが主要な構成要素になるであろう未来の状況のためなのです。」⁶¹彼の幻滅は、ルイ・ボナパルトの大統領選挙当選(1848年12月10日)の後、決定的となる。二月革命直後に社会的蘇生の希望として讃えられた民衆は、彼の眼にとって「盲目の群衆」(*masse aveugle*)⁶²に転身してしまうのである。ルナンの痛ましい幻滅以前、多くの作家は既に民衆を無思慮な「群衆」あるいは「暴徒」と同一視し、民衆の内に革命的事件の主役を認知することを初めから峻拒していた。1848年に民衆は、何を望むのか明瞭に自覚しないまま、パリで蜂起しバリケードを築いた。それは誰によって組織立てられたのでもない自発的な運動であったが、明確な建設的目標を欠いていた。庶民階級の歴史的・政治的機能を矮小化しようとするこのような意図を、ヴィニーの回想録の一節は雄弁に物語ってくれる。「この名もない群衆が、あらゆる障害を打ち破る訓練をしていた自分自身の重みに押されて、到る処に殺到した時、そして群衆が政府の二つの拠点(議会与パリ市庁舎一小倉)に押し寄せ、何の抵抗もなくパリの街路を埋めた時、人は群衆が茫然とした様子であちこち彷徨し、頭をかかえて座り込むのを見た。広場はこのような群衆で溢れていた。それは、無為で、戦闘も敗者もなく得た勝利の罰を受け、目標も意志もなく動物のように愚鈍な呑気さで歩き回っている群衆であった。」⁶³ヴィニーは「民衆」(*peuple*)に絶えず「群衆」(*"foule"*あるいは*"multitude"*)という語を置換しており、この語彙論的既定方針がそれ自体で著者の価値判断と歴史観を証言しているといえよう。また、引用文において作家が民衆の役割の歴史性を減殺するために援用している戦略は二つある。第一に、二月革命が「戦闘も敗者もなく」実現したとし(これは史実に反する)、七月王政がそれ自身に内在していた多様な欠陥のみにより自己崩壊したかのように主張して、民衆の行為の射程を無化していることである。第二に、ヴィニーは民衆における指導理念の欠落を指摘し、共和政成立に際しての偶発的要因を示唆して民衆に行動主体の地位を認めることを拒否している。パリの主人となった民

衆の虚脱状態と動物の愚鈍さの同一化は、歴史的イベントへの民衆の意識的参加という次元を剥奪することに貢献するのである。

このような思想は、再び我々を『感情教育』へと引戻してくれる。フロベールの作品は、それが提供する民衆の具体的な表象を媒介にして、民衆が誘発した歴史的論争に参加しているのだ。

『感情教育』は、その第一部と第二部を通じて民衆を匿名性の中に埋没させてしまう。語り手は民衆の存在を喚起するが、その相貌と行為の具体性において描写することはない。民衆は見られる対象であり、行動の主体としては現れない。彼らが匿名の集合体の地位を遂に放棄し物語の前景に登場するのは、第三部冒頭二月革命の成就を確認した2月24日の挿話においてである。この時フロベールのテキストは、民衆を革命運動の主役に昇格させ、まさに共和主義的・民主主義的歴史学が創り上げた神話に積極的に加担するかに見える。しかしテキストがどのような言葉で民衆によるチュイルリー宮殿占領を叙述しているか調べてみよう。

「突然、マルセイエーズがひびきわたった。ユソネとフレデリックは手すりにもたれてのぞいた。それは民衆だった。みんな階段におしよせてきた。無帽の頭、ヘルメット帽、赤い小帽子、銃剣、何もかもがまばゆい波のように揺れている。あまりの勢いに、宮廷の従僕も蟻集する群集の中に姿を没してしまっただ。人波は春分の潮におされて逆流する川のように、抵抗しようもない勢いで咆哮しながら上へ上へと昇ってきた。」⁶⁴

勝利した民衆の行進は、組織的な隠喩作用により、押し寄せる大波、氾濫した急流あるいは猛り狂った獣と混同される。革命の主役であるかに見えた民衆を描くために、フロベールは自然の天変地異あるいは動物的本能の領域に属する比喩を使用しているのである。後にゾラも『ジェルミナル』の中で飢えた炭鉱労働者たちの凄惨な行軍を描写する時に活用するであろう技法に基づいて、『感情教育』の作家は、読者の眼前で人間の行為を自然化し、それがまるで物理的地殻変動であるかのように提示するのである。歴史的・社会的次元は、自然的・生物学的含意によって中和され、政治的反乱は動物性の顕現に還元されてしまう。物語は民衆の象徴的な行為を自然と同一化することにより、その歴史性を稀薄にしていると言えるだろう。

民衆は間もなく無秩序な「群衆」に変わる。崩壊した王政の象徴である玉座が窓から放り投げられた後は、それまで抑圧されていた衝動が突然解放されたかのように破壊的行為に打ち興じることになるのである。そして元帥の間に入った群衆は、その雑多で異質な構成要素を露わにし始める。チュイルリー宮殿に侵入した民衆、ユソネに嫌悪の情を催させ、フレデリックが「崇高」だと見做す民衆は、「労働者」、「鍛冶屋」、「売春婦」、「徒刑囚」、「無頼漢」、「ごろつき」の集合体にはかならない。労働者や鍛冶屋が職業的範疇を指示するのに対し、売春婦、徒刑囚、無頼漢、ごろつきは、何よりも社会的、倫理的価値判断を含蓄するだろう。すなわち、「民衆」という語の政治

的内容は、その社会学的次元によって廃絶されてしまう。確かに、ユソネが争って玉座を弄ぶ労働者たちを見て「あれが主権者におさまった民衆だよ」⁽⁵⁶⁾と皮肉たっぷりには叫ぶ時、「民衆」という語は市民の集合体という意味論の側面を特権化しているかに見えはするが、この政治的意味内容は直ちに社会的含意によって置換されてしまう。チュイルリー宮殿における民衆は、政治的統一体としてではなく、構成の異質な社会学的集団として『感情教育』の中に立ち現れるのだ。そのことによってフロベールのテキストは、民衆の行為の政治的象徴性と歴史的価値を減縮させているのである。

この既定方針は、興味深い細部の意図的な排除によって一層強調されている。今問題になっている挿話を物語中に組み込むためにフロベールが参照し、それについての詳細な読書ノートに残っている歴史書や回想録の作者たちは、暴力的な民衆とは一線を画して秩序ある振舞を維持した集団が存在したことを報告している⁽⁵⁶⁾。ところが『感情教育』は、民衆の功績に数え入れられてもよいであろうこの行為を完全に抹消し、民衆の歴史的始動を自然の諸要素の爆発的開放に同一化させて、民衆を「下郎の徒」(“canaille”)あるいは「下層民」(“populace”)に変えてしまう。まさしく「民衆」を「下層民」から峻別することこそが民衆の社会的復権のための必要条件だと主張するユゴーなどと違い⁽⁵⁷⁾、フロベールの小説は蜂起した民衆を蛮族の群れと同列に置くのである。民衆の政治的・歴史的登場を非歴史的な動物性の圏域に溶解させ、社会的事実を可動的な現実の内部に位置づけしないで自然の運動に同化させること—それが、『感情教育』が提供する民衆の象徴的表現の、中心的戦略であり、修辞学的装置である。ルナンやヴィニーが、庶民階級を自分たちの行動の意味と重要性を認識しえない者と見做し、彼らの政治的未熟さと本能的無思慮を慨嘆するにとどまっていたのに対し、フロベールは人間性と自然の境界を廃絶させようとする語彙を動員して、庶民階級の無軌道な動きと抑制しがたい逸脱を際立たせるのだ。

しかし『感情教育』における民衆は、ただ単に盲目的で己れを知らぬ力として定義されるだけでなく、また賢明さの欠如によっても特徴づけられる。彼らが喝采を惜まないデルマルは、説得的な言説を全く体得していない弁士であり、彼らが「知性クラブ」の議長として敬意を表明するセネカルは最も無慈悲に民衆の大義に背くだろう。民衆の神話は、民衆に最も近く、六月暴動後には共和国の英雄として称揚されるデュサルディエによって否認され(「労働者だってブルジョア以上に価値がある訳ではない」⁽⁵⁸⁾)、フレデリック自身によっても否認される(「何というおうが、民衆はまだ未熟だよ」⁽⁵⁹⁾)。

書簡集や手記の中で、フロベールは民衆の非神話化という主題を様々に変奏させている。彼にとって、民主主義の歴史の神聖化された主体である民衆は、「群衆」や「動物の群れ」から識別されず、「愚鈍で忌まわしい程残酷」で、従って「常に憎むべき」対象にはかならず、「永遠の未成年」として社会的烙印を押され、その無定形な実体故に「数、多数、無限定的なもの」としてひたすら量化される。「暴動の日」に限っ

て大衆が何がしかの共感をフロベールから得られるのは、「その日には空に一陣の大風が立」ち、「自然の詩情と同じ程に雄勁で、それ以上に熱烈な人間の詩情が人を酔わせる」からだ、という。すなわち、民衆の運動と自然の同源性という主題はここでも反復されるのである。民衆のあらゆる神話化を峻絶するフロベールは、セネカルの表現に拠れば「法の下での平等」であり、そして作家自身に従えば、個人を「神政的専制主義下の時代におけるように完全に衰弱化」⁽⁶⁰⁾ させる民主主義に根底から敵対する。自由主義的個人主義の名による民衆の断罪、従って民衆を歴史的過程の主役、社会的進歩の担い手とし、集団的拘束をその手段として是認する思想の糺弾は、手記の一節に凝縮されている。「民衆は、個人よりも狭隘な人間性の表現であり、群衆は最も人間に対立するものである。」⁽⁶¹⁾

第二帝政期に発表された、二月革命前後を時間的座標とする数少ない小説の一つである『感情教育』は、フランス大革命という歴史的祖型との比較で1848年を過小評価し、社会主義理論に対して異議を申し立て、民衆の歴史的機能を否定することにおいて、フロベールと同時代の幾人かの作家の言説に同調する。しかし、それは物語に介入する語り手の直接的な註釈あるいはその年代記的な解釈の中ではなく、個別化された作中人物の言動と軌跡の叙述を媒介して行われるのである。歴史小説は、歴史的事実の正確な再構成と分析によってその価値を保証されるのではなく、歴史を説話論的構造に従属させ、不可避免的に歴史を非実体化させるのであり、それが小説化された歴史との違いだと言えるだろう。『感情教育』はいかなる命題も定式化することなく、修辞体系と虚構の冒険を援用して歴史とそれについての診断を意味するのである。歴史小説においては、詩学と歴史哲学は密接不可分であり相互に条件づけられるからだ。

注

- (1) cf. Raymond Aron, *Les Etapes de la pensée sociologique*, Gallimard, coll. "TEL", 1975, p.275.
- (2) この点に関しては、Pierre Rosanvallon, *Le Moment Guizot*, Gallimard, 1985, p.320-322 を参照。
- (3) Maxime Du Camp, *Souvenirs de l'année 1848*, Hachette, 1876 (Slatkine Reprints, 1979), p.51-56.
- (4) cf. 1848年3月付、ルィーズ・コレ宛の手紙。 *Correspondance*, "Pléiade", t. I, 1973, p.492-493.
- (5) 1866年12月15-16日付、ジョルジュ・サンド宛ての手紙。 *Correspondance*, Conard, t. V, p.258.
- (6) *Le Salut public*, 27 février 1848, in *Œuvres Complètes* de Baudelaire, "Pléiade", t. II, 1976, p.1029, 1034. *Le Salut public* (「公共福祉」) は、ポー

ドレールが友人のジャンフルーリ、トゥーバンと共同執筆して発刊した新聞。「公共福祉」は三人の合作になるため、全体のうちの箇所をボードレールに帰すかが問題になるが、この点に関しては研究者の意見も一致していない。いずれにせよ、ボードレールが「公共福祉」の着想者、指導者であったことは確かのようにある (cf. 人文書院版、『ボードレール全集』第三巻、1963, p.558-559)。また、後年ボードレールは、「1848年の陶醉」を「復讐への嗜好」、「破壊という自然な悦び」そして「読書の思い出」の結合の帰結として説明するが (*Mon coeur mis à nu*)、ここでは1848年のボードレールが、フランス大革命との比較対照において二月革命に価値判断を下していることを確認すれば充分である。なお、ボードレールと二月革命については、W. T. Bandy et Juels Mouquet, *Baudelaire en 1848*, Emile-Paul Frères, 1946; Marcel Ruff, "La pensée politique et sociale de Baudelaire" in *Littérature et société, recueil d'études en l'honneur de Bernard Guyon*, Desclée de Brouwer, 1973 を参照されたい。

- (7) George Sand, *Questions politiques et sociales*, Calmann-Lévy, 1879 (réédition: Plan de la tour, Editions d'aujourd'hui, 1976) p.274. 引用文は、『社会主義』と題された1848年4月付の記事中に読まれる。
- (8) Victor Hugo, *Choses vues 1847-1848*, "Folio", 1972, p.315. 引用文の日付は1848年3月。
- (9) A Edouard Odier, *Correspondance générale*, Le Divan, t.V (1847-1849), 1946, p.270.
- (10) Maurice 宛、1848年2月25日付の手紙。 *Correspondance*, A. Lacroix, t. II, 1875, p.280.
- (11) Gaudon 宛、1848年4月10日付の手紙。 *Correspondance*, t. VI, appendice, p.370. また、t. II, p.284, 320, 332, そして *Carnets*, t. III (1848-1850), Marcel Rivière, 1968, p.12 を参照のこと。
- (12) Alexis de Tocqueville, *Souvenirs*, "Folio", 1978, p.91-92.
- (13) 『感情教育』、生島遼一訳、筑摩書房、1966、292頁。以下『感情教育』からの引用はこの訳書に拠るが、文脈によって訳し直した場合もある。*L'Education sentimentale*, Classiques Garnier, édition de P.-M. Wetherill, 1984 (以下、E.S.と略記), p.305.
- (14) 同上、292頁 (E.S. p.306)。『感情教育』の草稿は「ある者 (l'un, l'autre)」という不定代名詞の代わりに、はっきりと固有名詞を用いている。"Ledru-Rollin imitait Danton, Raspail Marat, Lamartine Bailly... ricochets d'imitation," (Bibliothèque Nationale, N. A. F. 17607 f° 39 verso). 草稿から決定稿に到る段階で、同時代の歴史的人物の名前を抹消していくのは、この挿話に限らず、一般に『感情教育』の歴史の場面の構築を支配する修辞学的常数である。
- (15) 『感情教育』、16頁 (E.S., p.16)。
- (16) 同上、168頁 (ibid., p.175)。
- (17) cf. Géralde Nakam, "Le 18 Brumaire de *l'Education sentimentale*", *Europe*, septembre-novembre 1969; Lorenza Maranini, *Il '48 nella struttura*

della "Education sentimentale", Pise, Nistri-Lischi, 1963, p.95-96; Maria Amalia Cajueiro-Roggero, *La Représentation de l'Historie dans "L'Education sentimentale"*, thèse de III^e cycle présentée à Paris VIII, 1979, chapitre III.

- (18) マルクス、『ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日』、伊藤新一・北条元一訳、岩波文庫、1954年、18頁。
- (19) *Les Confessions d'un révolutionnaire* (1849), Marcel Rivière 1929, p.292.
- (20) cf. *Idée générale de la révolution au XIX^e siècle*, Marcel Rivière, 1923, passim.
- (21) Victor Hugo, *op. cit.*, p.460.
- (22) Tocqueville, *op. cit.*, p.129.
- (23) *Ibid.*, p.130, 172-173.
- (24) Ernest Renan, *L'Avenir de la science*, in *Œuvres Complètes*, Calmann-Lévy, t. III, 1949, p.1020.『科学の未来』は、発表されたのは1890年であるが、執筆は1848-49年に当る。引用文を含む第18章は、全節にわたって社会主義の諸問題を論じている。
- (25) 1848年12月29日付、アンリエット・ルナン宛の手紙。 *Œuvres Complètes*, t. IX, 1960, p.1153.
- (26) *L'Avenir de la science*, p.1020. ルナンはここで、19世紀前半にはフランス社会が「危機的時代 (époque critique)」にあり、新たな「有機的時代 (époque organique)」の到来を待望している、というサンシモン主義者たちの考えを想起しているように思われる。
- (27) *Conservation, révolution et positivisme*, Ladrance, 1852, p.93.
- (28) *Ibid.*, p.94.
- (29) *Ibid.*, p.326.
- (30) 『感情教育』、56頁 (*E. S.*, p.58)。
- (31) 同上、190頁 (*ibid.*, p.197)。
- (32) 同上、191頁 (*ibid.*, p.199)。原文は“le niveau commun sous la loi”。“le niveau commun”という表現は、19世紀の政治語彙体系においては「社会階級の平均化」を含意し、それは社会主義の基本的綱領の一つである「平等化」と同義であった。cf. Jean Dubois, *Le Vocabulaire politique et social en France de 1869 à 1872*, Larousse, 1962, p.78.
- (33) 同上、297頁 (*ibid.*, p.310)。
- (34) 同上、130頁 (*ibid.*, p.137)。引用文を含む長く組織的なセネカルの政治的肖像は、アンリ・ミットランによる優れた記号学的イデオロギー分析の対象になった。Henri Mitterand, “Discours de la politique et politique du discours dans un fragment de *L'Education sentimentale*”, in *La Production du sens chez Flaubert*, Colloque de Cerisy, Union générale d'éditions, 1975, p.125-141.
- (35) 同上、362頁 (*ibid.*, p.376)。

- (36) 同上、49頁 (*ibid.*, p.51)。
- (37) 同上、130頁 (*ibid.*, p.137)。
- (38) cf. 同上、253頁 (*ibid.*, p.263)。
- (39) 同上、289頁 (*ibid.*, p.302)。興味深いことに、ゴンクール兄弟の小説『マネット・サロモン』(1866)の主人公、画家アナートルも1840年代の社会思想の磁場の中で、『人道的キリスト』という標題を冠した作品を産出する。未消化の社会主義思想と通俗化されたカトリック教を混在させるその作品の主題と、ベルランの絵の構想は驚く程近似している (cf. *Manette Salomon*, Union générale d'éditions, 1979, p.102)。
- (40) 同上、168頁 (*ibid.*, p.176)。
- (41) 同上、348頁 (*ibid.*, p.363)。
- (42) 『感情教育』における社会主義者たちの肖像と言説は、フロベールが19世紀の諸諸の社会主義の潮流に関して幅広い読書から得た知識を凝縮している。この読書ノートは、ルーアン市立図書館所蔵『ブヴァールとペキュシェ』関係草稿中に含まれる (整理番号 Ms g 226⁽⁷⁾ f^{os} 179-283)。この未完の小説の第六章で第二共和政の挿話を執筆する際、フロベールが読書ノートを再利用したからである。チュントはこの読書ノートと『感情教育』を比較検討し、フロベールが使用した文献を同定した。(Alberto Cento, *Il realismo documentario nell' "Education sentimentale"*, Napoli, Liguori, 1967) しかし彼は小説の決定稿とのみ照合したのであって、その草稿は参照しておらず、しばしば典拠を指摘することに終始している。そこで興味深いと思われる研究課題は、第一にフロベールが参照した文献と彼の読書ノートを突き合わせて、作家が何を摂取し何を排除したかを探り、いかにして資料的知を構成したかを明らかにすることである。フロベールの読書ノートの取り方が、彼の思想的前提と美学的方向性をある程度まで啓示してくれるのではないか、という問いが許される筈である。第二の作業は、粗筋 (scenarios) から下書 (brouillons) を経て決定稿に到る過程で、構成された資料的知がどのようにして主題論的構造と修辞学的体系の中に組み込まれていくかを知ることである。あらゆるアヴァン・テキストは、作家の社会的ディスクールを集約し、移動させ調節する。要諦は、読書ノートと草稿の分析を通して、フロベールが参考文献の社会的、イデオロギー的言説をいかに改変していったかを問うことである。部分的な対応関係の指摘で事足りるとせずに、資料的なものから小説へ、範列的踏査から連辞的説話装置の構築への移行を統御するエクリチュールをその現場において把握すること。なぜなら、作品とアヴァン・テキストの関係は単に因果性や論理的連繋であるばかりでなく、同時に相克や干渉でもありうるからである。
- (43) cf. *Correspondance*, "Pléiade", t. II, 1980, p.698, 718-719.
- (44) 1868年7月5日付、ジョルジュ・サンド宛。 *Correspondance*, Conard, t. V, p.385.
- (45) 1868年1月24日付、ルロワイエ・ド・シャントピ嬢宛。 *Correspondance*, Conard, t. V, p.352. また t. V, p.148, t. VI, p.10 も参照のこと。

- (46) この点に関しては、Paul Bénichou, *Le Temps des prophètes*, Gallimard, 1977 を参照願いたい。ついでに付言すれば、政治・社会現象についての考察の中に宗教的要因を介入させたのは、社会主義者たちに限らない。19世紀フランスが社会的解体の危機に直面しているという意識を持っていたギゾー、トクヴィル、キネらは、しばしば宗教的なものに準拠してその危機を克服するための統一的原理を再構築しようとしていたのである (cf. Claude Lefort, “Permanence du théologico-politique ?” in *Essais sur le politique*, Seuil, 1986, p.251-300)。
- (47) 1868年9月末付、ジョルジュ・サンド宛の手紙。Conard, t. V, p.407.
- (48) Maurice Tournier, “Le mot “Peuple” en 1848: désignant social ou instrument politique ?”, *Romantisme*, N°9, 1975.
- (49) 1848年3月8日付、シャルル・ボンシー宛の手紙。Correspondance de George Sand, Garnier, t. VIII, 1971, p.330.
- (50) 1848年5月14日付、母宛の手紙。Oeuvres Complètes, t. IX, p.1070.
- (51) アンリエット・ルナン宛、1848年7月30日付の手紙。同上、1101頁。
- (52) アンリエット・ルナン宛、1848年12月16日付の手紙。同上、1148頁。
- (53) Vigny, *Mémoires inédits, Fragments et projets*, Gallimard, 1958, p.149. ユゴーもまた、民衆の目的意識の欠如を慨嘆し、2月24日バステューユ広場に集合した彼らを前にして、次のような印象を書き記している。「哀れで偉大な民衆、無自覚で盲目の民衆よ！彼らは、何を欲しないかは知っているが、何を欲しているかは知らないのだ。」(Victor Hugo, *op. cit.*, p.285)
- (54) 『感情教育』279頁 (E. S., p.292)。
- (55) 同上、280頁 (*ibid.*, p.293)。
- (56) cf. Daniel Stern, *Histoire de la Révolution de 1848*, Calmann-Lévy, t. 1, 1896, p.201-203 (première édition: 1850-1853); Garnier-Page, *Histoire de la Révolution de 1848*, Pagnerre, t. V, 1861, p.209-212; Louis Tirel, *La République dans les carrosses du roi*, Garnier, 1850, p.82. この三書がフロベールがチュイルリー宮奪取の挿話を書くために参考にした基本的文献である。
- (57) 「下層民は暴動を起こすにすぎない。革命を行うには民衆が必要だ」 (Ms 13, 421, f° 13) René Journet et Guy Robert, *Le Mythe du peuple dans “Les Misérables”*, Editions Sociales, 1964, p.106, note 31 からの引用。
- (58) 『感情教育』、385頁 (E. S., p.400)。
- (59) 同上、357頁 (*ibid.*, p.372)。
- (60) 以上、断片的に引用した箇所は次の通り。Correspondance, “Pléiade”, t. II, p.293; Conard, t. VI, p.228, 281; t. V, p.308.
- (61) *Carnet 2, Notes générales, lectures, etc. (1859-1872)*, in *Oeuvres Complètes de Gustave Flaubert*, Club de l'Honnête Homme, t.8, 1973, p.267.